

「海のごちそう地域モデル in 下関 —FUKU レボリューション演習—」活動報告

山本正俊、山脇寛子、渡邊義明、水津玉美、藤井智行、前田知子

Activity Report: “Feast of the Sea” Shimonoseki Model

by

Masatoshi Yamamoto, Hiroko Yamawaki, Yoshiaki Watanabe,
Tamami Suizu, Tomoyuki Fujii, and Tomoko Maeda

要旨

本稿は、「FUKU レボリューション」¹⁾ 【主催：海のごちそう地域モデル in 下関（以下、「本事業」という。）（一般社団法人 Minato de フォーラム）、共催：日本財団²⁾ 海と日本プロジェクト】へ本学保育学科の教員・学生が参加・実施した活動報告である。地球温暖化の影響などによる海水温の上昇と共に、昔から下関で親しまれてきた「フグ」にも変化が起きている。下関で育つ子ども達にこの「フグ」を食べ、知り、愛着を感じてもらうことをきっかけに、海洋環境への興味や関心を深めてもらうことを目的としている本事業は、これまで本学の学生たちが体験することのできなかった規模での活動であった。本格的な実習体験のない本学保育学科の1年生が、自ら学んだことをどのように園児たちへ教えていくか試行錯誤したこの体験は、今後の実習や保育・教育現場に挑むにあたって非常に大きな糧となるものと言える。

キーワード：地球温暖化、海洋環境、環境問題、下関市、フグ、教育実習

1 「海のごちそう地域モデル in 下関」について

「海のごちそう地域モデル事業」とは、日本財団による「海と日本プロジェクト」の一環で実施されているものである。まず、この「海と日本プロジェクト」とは、次のようなものである。

『さまざまなかたちで日本人の暮らしを支え、ときに心の安らぎやワクワク、ひらめきを与えてくれる海。そんな海で進行している環境の悪化などの現状を、子どもたちを中心に海への関心や好奇心を喚起し、海の問題解決に向けたアクションの輪を広げることが目的に日本財団や政府の旗振りのもと、オールジャパンで推進するプロジェクトです。』³⁾

「海のごちそう地域モデル事業」は、2023年度時点で全国8地域（北海道：函館、青森県：大間、山形県：庄内浜、静岡県：熱海、富山県：射水、鳥取県：鳥取、山口県：下関、鹿児島県：鹿児島）で展開されており、各地域の海や海産物の課題を様々な形で幅広く地域に伝えていくプロジェクトである。その下関版である「海のごちそう地域モデル in 下関」は、日本財団「海と日本プロジェクト」の推進パートナーとなっている一般社団法人 Minato de フォーラムが2022年度より参画しているものである。本事業は、下関を代表する魚である「フグ（下関では福を呼ぶ縁起の良い魚としてフクと呼ぶ）」にスポットを当て、身近な下関の海で起こっている様々な変化について「知る」「食べる」「触れる」といういろいろな体験を通して関心を持ってもらうことを目的としている。また、それらの体験を通して「100年後の下関の海」についてそれぞれが想いを巡らせ、その想いを絵という形でアウトプットし、それらを集めて2025年度に絵本を制作する計画となっている。

縁あって、本事業2年目となる2023年度から、本学保育学科は連携する教育機関として参加することとなった。本事業が目指す教育機関連携は、次のように示されている。

『幼児教育を大学で学ぶ学生が、低利用のサバフグなどの天然フグを通して、海洋環境の変化や下関の食文化について、次世代への教育に活かすことを目指す取り組みです。背景にある海洋環境の変化による魚種交代の現状や、毒をもつフグの扱い方を学び、知育ツールなどのコンテンツを創作し教育実習で幼児たちに教えます。また、学生たちが実際に教えながら、彼ら自身の学びを定着させて下関の海の課題を自分ごと化するきっかけを創出することが狙いです。大学生や子どもたちが、教育と食育面で地域の人々や食文化に関わり、下関の誇るフグについて総合的な学びを得ていく働きかけを行い、次世代を担う若者・子どもたちに経験、学びの機会を提供することを目指していきます。』⁴⁾

つまり、現在、下関の海で起こっていることをまずは本学保育学科の学生が学び、それらを身近に感じてもらうための学習コンテンツを創作して園児たちへ提供し、今後も変化していくと思われるその海と共に生きていくことへの意識づくりを行っていくものと言える。保育者を目指す本学保育学科の学生にとっては実習以外の場で実践体験を積む貴重な経験になり、また、子どもたちに限らず学生自らも海洋問題や下関の未来について考える機会となるものである。

2 今年度の主な活動

2023年度、主な活動は（表1）の通りである。活動内容としては、学生自身が環境問題や下関のフグの現状を知ることや、下関市民であっても頻繁には食卓に上がらないフグを実際に食べる機会も含まれており、それらの体験から、園児たちへ身近に感じてもらいたいと思ったことを学習コンテンツとして仕上げていき、実際に2回の教育実習で発表するというものであった。（表1）の活動以外にも、学生は各々の時間を使って保育学科教員や様々な関係者の方々からのアドバイスを参考に制作活動を進め、学生全員で集まり発表練習を行うなどして準備を重ねた。

表1 2023年度 主な活動一覧

回	日付	場所	内容
1	2023年5月22日（月）	本学 図書館研修室	オリエンテーション
2	2023年7月12日（水）	下関市生涯学習プラザドリームシップ「宙のホール」	キックオフイベント
3	2023年7月15日（土）	唐戸市場、海響館	FUKUレボ演習ワークショップ
4	2023年8月29日（火）	本学 図書館研修室	学習コンテンツ構想発表（オンライン）
5	2023年9月11日（月）	本学 図書館研修室	学習コンテンツ中間発表
6	2023年11月11日（土）	本学 C31教室	学習コンテンツ確認作業
7	2023年11月25日（土）	下関短期大学付属第二幼稚園	第1回 教育実習
8	2024年1月13日（土）	社会福祉法人 松美会 しおかぜの里こども園	第2回 教育実習

2・1 オリエンテーション（参加学生向け）

主な参加者：保育学科1年生有志学生、保育学科教員、本学学長、柳川舞氏（主宰）、
ふくだのぞみ氏（監修）、安本みゆき氏（事務局）

主な活動内容：自己紹介、事業概要の説明、「海感VR360°」体験 等

このオリエンテーション前に、本事業の主宰である柳川舞氏（一般社団法人 Minato de フォーラム）へ保育学科1年全員を対象としたキャリア教育と事業説明を兼ねた講義を依頼し、その講義を受けた上で参加意志を示した学生は10名（のちに1名進路変更により不参加となったため、最終的な参加学生は9名）であった。その学生達と柳川氏、監修のふくだのぞみ氏（絵本作家、イラストレーター、保育士）、そして教員も含め参加者全員で自己紹介を行って交流を深めたのち、柳川氏とふくだ氏から改めて本事業の概要説明やフグにまつわるクイズをし

ていただき、少しずつ理解を深めていった。

次に、本事業の代表的なコンテンツである「海感 VR360°」を学生も教員も体験し、今後の具体的な活動への理解を深め意欲を高めた（写真1）。この「海感 VR360°」とは、下関市の海の中の様子を二木あい氏（水族表現家）が撮影し、それをVR体験出来るようにしたものである。VRゴーグルを装着して上下左右に頭を動かせば下関の海の中の映像を360°見渡すことができ、その中で生きている魚の様子も映し出されている。実際の教育実習で子どもたちがこの「海感 VR360°」を体験する際には、椅子に座った状態で海水と砂が入ったタライに足を浸け、五感を刺激しながら映像を見るという説明を受けた。

また、本事業におけるもう一つの目玉となっているフクフリットの説明もあった。フクフリットは、本事業で2022年度に開発が開始されたものである。海洋環境の変化により、これまで下関のフグ文化の中心であったトラフグの姿が減少してきており、入れ替わるような形でこれまで南方にいたサバフグなどが下関近郊の海に北上してきている現状がある。この現状を新たなフグ文化の創出の機会と捉え、安価でも美味しく食べられるものをとすることでこのフクフリットは開発されている。実際の教育実習では参加者全員にこのフクフリットが振る舞われ、「食べる」経験を通して海との繋がりを感じてもらおうというねらいがあるとの説明も受けました。

この日は、学習コンテンツ制作を個人もしくはグループで行うのかの意思確認、簡単な構想の聞き取りも行われた。その後の作業は各々が時間を作って進めることになるが、ふくだ氏から「いつでも相談を」とのお言葉を頂き、サポート体制の提示があったことで学生達の安心感も高まった（写真2）。

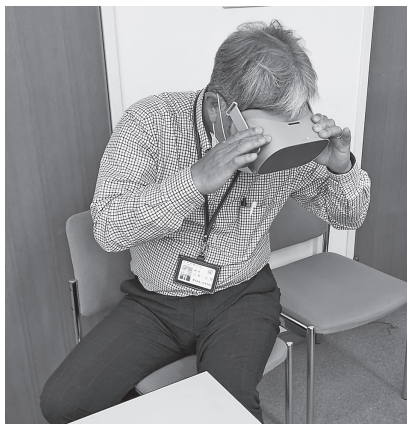


写真1 「海感 VR360°」体験



写真2 オリエンテーション風景

2・2 キックオフイベント

主な参加者：保育学科1年生有志学生、保育学科教員、柳川舞氏（主宰）、
ふくだのぞみ氏（監修）、安本みゆき氏（事務局）、下関市前田市長、
二木あい氏（水族表現家）、酒井治己氏（水産大学校名誉教授）、
水産大学校有志学生、他多数

主な活動内容：事業概要の説明や対談およびパネルディスカッションの観覧、
フクフリットとフクカクテルの試食 など

本事業に様々な形で関わる関係者の多くが一堂に会したイベントである。本事業の概要や今後展開される活動内容が紹介され、先述の「海感 VR360°」を下関市長が体験したり、その開発に携わった二木あい氏が下関の海の印象や世界中の海の現状について語ったりと、本事業の規模や現在に至るまでの多くの人々の努力を感じた時間であった。

イベント後半で、先述のフクフリット、そして下関の海の恵みをイメージしたカクテル（ノンアルコール）が全員に振る舞われた（写真3）。フクフリットに関しては、開発に際し作成された「フクフリット5カ条」も紹介された。フクフリット5カ条とは、「1条 天然フグであるべし、2条 下関近海の海を凝縮した塩を使うべし、3条 下関近海で獲れるアオサで海の香りをまとうべし、4条 天然フグの種類を表記すべし、5条 日常のちょっとしたお祝いに食べて、気持ちをハッピーにすべし」¹⁾である。フグに限らず調味料にも下関との繋がりがあるものを取り入れ、これまでのフグ文化よりも更に身近な楽しみとして広く普及するようにとの願いが込められている。このイベントに参加したことで本事業の全体像が掴みやすくなり、その一端を担うという自分たちの役割を再確認することが出来た。



写真3 フクフリット・フクカクテルの試食・試飲

2・3 FUKU レボ演習ワークショップ

主な参加者：保育学科1年生有志学生、保育学科教員、柳川舞氏（主宰）、
ふくだのぞみ氏（監修）、安本みゆき氏（事務局）、水産大学校有志学生、
他多数

主な活動内容：フグのさばき方の実演、フグの扱い方についての講習、唐戸市場見学、
海響館見学および海響館スタッフからのレクチャー、
「100年後の海の絵」の制作 など

「FUKU レボ演習ワークショップ」と題し、学生たちが海やフグについて学ぶ機会を提供頂いた。このワークショップ前半部分への参加者には、本学保育学科の学生だけでなく国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産大学校（以下、「水産大学校」という。）の学生もいた。2校の参加学生の大半は20歳前後と年齢の近い者が多かった。年齢が近いながらも全く異なる分野を学ぶ者同士、互いの言動によりいい影響を受けてくれるのではという期待を持ちながらワークショップがスタートした。

まず、下関を代表する観光地である「唐戸市場（下関市唐戸町）」では、フグのさばき方の実演や毒のある部位、フグの生態にまつわる現状についての講習を受け、「知る」体験が出来た。また、数種類のフグを見比べたりそれぞれの皮に指で触れて感触を確かめたりと、「触れる」体験も出来た（写真4）。次に、唐戸市場に隣接する水族館「市立しものせき水族館 海響館（下関市あるかぼーと）」では様々な種類のフグを観察し、海響館のスタッフの方からフグの生態や特徴についてのレクチャーを受けた。また、海響館で実践されている展示の工夫等についても伺うことができ、学習コンテンツの見せ方の参考となる有り難い体験であった。その後、先程の唐戸市場へと戻り、昼食として唐戸市場内のフグをはじめとするお寿司や唐揚げなどを「食べる」経験をさせて頂き、本事業の3要素「知る」「触れる」「食べる」を学生自身も全て体感したことになった。

ワークショップ最後の内容は、実際の教育実習で園児たちにも描いてもらう「100年後の海の絵」の制作であった。クレヨン、ペンの他、様々な色のビーズやシール、フェルトや毛糸なども用意されており、それぞれが思い思いに描けるように材料の選択肢が幅広くなっていることを体感出来たことは今後の活動の参考になった。学生達は、このワークショップを通して学んだり感じ取ったりしたことを思い返ししながら、それぞれが思う「100年後の海」を絵で自由に表現していた（写真5）。



写真4 さばかれたフグに触れる



写真5 「100年後の海の絵」制作風景

2・4 学習コンテンツ構想発表

主な参加者：保育学科1年生有志学生、保育学科教員、安本みゆき氏（事務局） 他

【オンライン参加：柳川舞氏（主宰）、ふくだのぞみ氏（監修）、他】

主な活動内容：学習コンテンツの構想発表

学生達は「FUKU レボ演習ワークショップ」から約1ヶ月半の間、ワークショップで訪れた唐戸市場や海響館での体験をもとに、子どもたちに「何を感じ取ってもらいたいか」や「どのような体験をしてほしいか」等の視点から学習コンテンツの構想を膨らませており、それぞれが内容のおおまかな説明を行った。学生達の考えたものは多岐に渡っていた。例えば、海洋問題についてのクイズ、海がテーマの手遊び、フグの塗り絵・パズル・歌・折り紙、フグのヒレの動きを再現する立体模型などである。この日はオンラインであったものの、柳川氏やふくだ氏、そして水産大学校有志学生からも様々なアドバイスを頂いたり意見交換を行ったりと充実した活動となった。具体的には、制作物を効果的に見せるための改善点の呈示や、子どもたちの五感をより刺激するための小道具の導入の提案などの意見をいただき、次回の中間発表までの見通しを持てる内容となった。この段階から学生達は、ふくだ氏と個人的にやりとりを重ねたり、それぞれの構想に関連する専門性を持つ著者らとも協力したりしながら、教育実習に向けて準備を進めていった。

2・5 学習コンテンツ中間発表

主な参加者：保育学科1年生有志学生、保育学科教員、下関短期大学付属第二幼稚園園長、しおかぜの里こども園職員、柳川舞氏（主宰）、ふくだのぞみ氏（監修）、安本みゆき氏（事務局） 他

主な活動内容：学習コンテンツの発表、必要機材等の確認

学習コンテンツ構想発表でいただいたアドバイスや意見をふまえ、改善や変更を加えたものを発表した。前回は内容の大まかな発表であったが、今回は使用する機材やその操作への人員の配置、所要時間やサポートが必要な部分の洗い出しなど細部の確認も行われた。また、これまでは発表内容を単体で見えてきたが、実際の教育実習での発表順や内容の偏りを整えるなど、全体を通してのバランスの検討も行った。

この段階では教育実習を行う園での発表環境がまだ不明であったため、環境構成の詳細（プロジェクターやスクリーンの設置場所、作業で使用する機の配置、発表者の立ち位置等）を詰めることは出来なかった。

2・6 学習コンテンツ確認作業

主な参加者：保育学科1年生有志学生、保育学科教員、安本みゆき氏（事務局）

主な活動内容：学習コンテンツの仕上がり確認、発表者の絞り込み

学習コンテンツ中間発表で頂いたアドバイスやご意見をもとに、再度改善等を加えたものを発表した。発表時の声のボリュームや話すスピードの調整、視覚情報刺激の呈示の仕方などの細部についても意見交換が行われた。全員の内容を確認し、その後、総合的に検討を行った結果、2園の教育実習で実際に発表するものを絞り込んだ。最終的に4名が主となって学習コンテンツを発表し、残りの学生はサポーターとして動くこととなった。4名の発表者の内容や発表時間を考慮した結果、2園の教育実習それぞれの担当者（1名のみ両園で発表）を以下の様に選出し発表を行うことに決定した。

1園目：【学生1】フグの種類や毒について

【学生2】海の汚れについて、手遊び「魚が跳ねて」、フグのネックレス制作

【学生3】フグの鳴き声クイズ、フグ提灯を触ってみよう、フグの折り紙制作、
海に浮かぶゴミについて

2園目：【学生1（1園目でも発表）】フグの種類や毒について、海の汚れ・ゴミについて

【学生4】模型を用いたフグのヒレの動きの特徴解説、フグの張り子を使ったオリ
ジナルのフグ制作

2・7 第1回 教育実習

主な参加者：保育学科1年生有志学生、保育学科教員、下関短期大学付属第二幼稚園
年長児、年長児の保護者、園長、教職員、柳川舞氏（主宰）、

ふくだのぞみ氏（監修）、安本みゆき氏（事務局） 他

主な活動内容：学習コンテンツ発表、「海感 VR360°」体験の補助、「100年後の海の絵」
制作時の補助、フグフリット試食 他

1回目となる教育実習は本学の付属幼稚園である「学校法人河野学園 認定こども園 下関短期大学付属第二幼稚園（下関市彦島塩浜町）」での実施であった。学生は全員、今年度後期のはじめに体験実習（2日間）という形で当園を訪れており、多少馴染みのある場での活動となった。この教育実習の直前、付属第二幼稚園では行事として園児の作品展が開かれていた。作品展のテーマがまさに本事業の内容に繋がる「海」であり、その展示場所であるホールが教育実習の会場となっていた。ホール全体が海の中にいるかのような装飾になっており、窓の外には本物の海が見えるという素晴らしいロケーションであった。園児たちは作品展に向けた作品づくりを終え、自分の作品が飾られている中での本事業への参加となった。

まずは、本事業について事務局担当者から園児向けの解説があったのち、本学の学生による学習コンテンツの発表という流れであった。先述のように、ここでは3名の学生が学習コンテンツの発表を行った。【学生1】は、最初に、海にはどんな生き物が生息しているか園児に問いかけて海へのイメージを膨らませた。園児たちからは、フグを含めクジラやタコなどの名前が口々に出ていた。その後、今回の主役であるフグに焦点を絞り、フグの種類やヒレの特徴、毒がある部位、フグ料理の種類などを手描きのイラストで示した（写真6）。【学生2】は、海洋環境の悪化がフグの生活にも影響を及ぼすことについて、イラストを示しながら解説した。次に、学生1の発表から着席したままであった園児たちの気分転換も兼ねて手遊び「魚が跳ねて」を全員で行い、最後はトイレットペーパーの芯を材料にしたフグのネックレス制作を行った（写真7）。工程の中で多少難易度の高い部分では、学生が園児たちの様子を見ながら援助を行った。【学生3】は、海に見立てた大きな青い袋の中から様々な物を取り出して見せながら発表を行う（写真8）という、園児の興味を引く仕組みを用いて発表を行った。下関ではフグを「フク」と呼ぶことを、「ふぐ」の2文字のパネルから濁点のパーツを外して「ふく」に変化させる様子を視覚的に見せたり、フグが威嚇する際の鳴き声をクイズ形式で出題して園児に聞かせたりした。更には、袋の中にフグ提灯を入れておき、園児たちに手を入れてもらい触った感触を楽しんでもらったりもした。園児たちからは、フグも鳴くことへの驚きやクイズを楽しんでいる様子、フグ提灯のトゲトゲ・チクチクとした感触への様々な反応が見られ、学生たちも自然と笑顔を引き出されているようであった。その後は海に漂うゴミの一例として、ペットボトルやストローなどの実物を海に見立てた袋から取り出して見せたりもした。最後はフグの折り紙を折り（写真9）、それを海に見立てた台紙に貼り付け終了した。



写真6 【学生1（写真右）】の発表
（フグの毒やフグ料理についての説明）



写真7 【学生2（写真中央）】の発表
（フグのネックレス制作の説明）



写真8 【学生3（写真中央）】の発表
（海に見立てた袋を使っでの発表）



写真9 【学生3（写真右）】の発表
（フグの折り紙の折り方の説明）

【学生3】の発表のあとは、園児たちが「海感 VR360°」を体験し、園児たちが「100年後の海」を想像しながら絵を描く流れであった。「海感 VR360°」は、足元に海水と海辺の砂を入れたタライを置き、その中に園児が足を浸けながら VR を観ることになっており、学生達は VR を観終わった園児の足元をタオルで綺麗に拭き上げたり、タライ周辺の水飛沫を拭き取ったりなどのサポートを行った。VR 機器の装着に戸惑ったり不安を示したりする子どももいたが、保護者や学生たちの声かけを受け、参加した園児全員が無事体験を終えることが出来た。VR 機器の数の関係で3名ずつの視聴となるため、同時進行でその他の園児たちは海の絵を描くことになった。保護者達が協力して大きな模造紙に海中をイメージした装飾を施し、そこへ園児たちが思い思いに描いたフグや海の中の生き物達の絵を切り抜いて貼り付けていった。描くことに戸惑っている子やハサミを使用する子の援助等、それぞれ学生が自分なりに考えて動いていたのが印象的であった。模造紙への貼り付け作業を終え全員で絵の完成を喜んだ後、柳

川氏から本事業の簡単なまとめの話があった。その後、園の調理室から出来立てのフクフリットが運ばれ、全員で試食を行った。

2・8 第2回 教育実習

主な参加者：保育学科1年生有志学生、保育学科教員、しおかぜの里こども園年長児、保護者、園長、教職員、柳川舞氏（主宰）、ふくだのぞみ氏（監修）、安本みゆき氏（事務局） 他

主な活動内容：学習コンテンツ発表、「海感 VR360°」体験の補助、「100年後の海の絵」制作時の補助、フクフリット・フクマン試食 他

2回目の教育実習は、「社会福祉法人 松美会 しおかぜの里こども園（下関市彦島迫町）」にご協力頂いた。1回目と違い、学生も教員も慣れない環境の中での実施であった。まずは、1回目の教育実習と同様に、事務局担当者から園児向けに本事業の解説があったのち、本学の学生達の学習コンテンツの発表という流れであった。今回は、2名の学生が学習コンテンツの発表を行った。最初の発表者である【学生1】は、1回目の教育実習でも発表した学生である。前回同様に、海にはどんな生き物が生息しているか園児に問いかけて海へのイメージを膨らませた後、今回の主役であるフグに焦点を絞り、フグの種類やヒレの特徴、毒がある部位などを手描きのイラストで示した。今回の発表では、その内容に前回【学生2】と【学生3】が発表した内容を加えたものへ変更した。具体的には、【学生2】の海洋環境についての内容と、【学生3】が実践した、海に漂うゴミの一例としてペットボトルとスプーンの実物を見せるという内容を加えた（写真10）。

次の発表者は【学生4】である。まず、「FUKU レボ演習ワークショップ」で訪れた海響館で撮影したフグの特徴的な泳ぎ方であるホバリングのような動きや、他の魚ではなかなか見られないバックする泳ぎ方を動画で見せ、フグの特徴へ意識を向けていった。そして、フグの特徴的なパタパタとする動きを表現できる自作の模型を園児たちに見せ（写真11）、動かすための仕組みを園児たちに操作してもらった。実際に模型が動く様子を見た園児の中には、どのようにして模型が動いているのか、仕組みに興味を持っているような様子も見られた。フグの特徴が次第に園児たちへ伝わり始めたところで、フグの動きに関する歌詞を組み込んだ手遊びを全員で行い、次の活動内容を見据えて気分転換を図った。最後の発表内容は、フグの張り子を使ったオリジナルのフグ制作であった。障子紙と糊を使い、張り子を作る要領でフグ提灯の様な球体状のフグの体を成形した物（写真12）の中から園児たちは各々好きな色を選び取り、それぞれ目や口、ヒレのパーツを自由に貼り付けてもらった。園児の中にはヒレの場所を質問する子、見本の写真を見ながら貼ろうとする子、自分の思った場所に迷わず貼る子など様々な

タイプがあり、学生もそれぞれの思いに寄り添う様に援助を行っていた。更に、ヒレに模様を描いたり全体にシールを貼ったりしてオリジナルのフグを作り上げた後、園児たちは保護者のもとへ見せに行き、共に完成を喜んでた。ちなみに、このフグの張り子については、当日参加出来なかった年長児の方も人数分準備をしておき、後日園側から参加出来なかった年長児たちへ手渡してもらうようお願いした。フグの張り子の制作終了後、【学生4】が学生による学習コンテンツ発表全体のまとめとして、下関で有名な魚であるフグをこれからも大切にしていくために、少しでもフグに興味を持ったり身近な下関の海の環境へ目を向けたりということを見ておいてほしいという内容の言葉を園児たちへ伝え（写真13）、発表を終了した。

【学生4】の発表以降は第1回の教育実習と同様、「海感VR360°」体験と同時進行の形で、VRの順番を待つ園児たちは保護者と協力しながら「100年後の海の絵」を完成させるという流れであった。「海感VR360°」や「100年後の海の絵」の制作での補助は、学生それぞれが前回の体験をいかし、比較的スムーズに行うことが出来ていた。そして、最後は第1回目目の教育実習でも提供されたフクフリットが用意され、加えて今回はフクを餡に練り込んで作られた「フクマン」も提供された。



写真10 【学生1】(写真中央)の発表
(フグのさばき方、毒のある部位の説明)

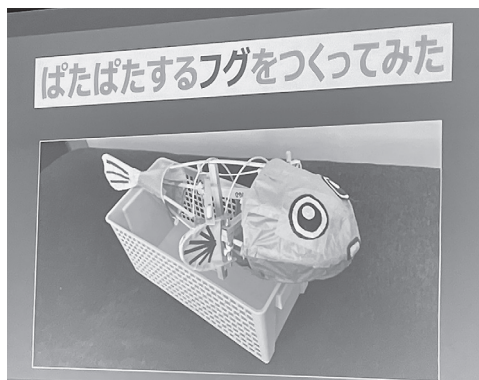


写真11 【学生4】が制作した模型
(フグの動きを表現出来る模型)



写真12 【学生4】が準備したフグの張り子



写真13 【学生4】によるまとめ

3 2回の教育実習を振り返って

1回目の教育実習は初めての発表ということもあり、発表者はもちろんサポーターも開始直後は緊張の色が濃かった。しかし、園児たちとの関わりの時間が進むにつれ、自然と会話が弾んだり笑顔で制作作業に取り組んだりという姿が見え始めた。学習コンテンツの発表では、特に制作活動で予定よりも時間がかかってしまう部分があった。園児たちの作業の進捗状況や満足感を優先したい気持ちから、経過時間への気づきが遅くなってしまい、その後の活動へ影響を及ぼしかねない状況となる場面があった。このように、教育実習当日は、準備を重ねてきた自分たちの発表だけでなく、「海感 VR360°」の体験や「100年後の海の絵」の制作活動等もあり、全体を通して現場で臨機応変に動くことが求められた。柳川氏やふくだ氏などから指示を頂いたり、その方々の動きを参考にしながら教員が学生へ指示を出したりということがあり、この1回目の教育実習は全員が全体を把握することへ意識が向く部分が多かった様に感じる。しかし、次に繋がるような課題や発見もありつつ、学生たちは1年生ながらよく最後までやり通したと感じた。

2回目の教育実習では、学生自身が全体の流れを理解していることへの安心感があった。発表する学生や内容の違いはあるものの、活動内容に合わせて求められる動き等は前回の経験をいかして学生自身が考えることが出来た。ただ、この2回目では、前回と違い「海感 VR360°」のVR機器が2台しか作動しないというトラブルが発生した。実習開始前からVR体験の直前まで機器の調整が行われたもののやはり作動せず、園児全員の視聴が終了するまでにかかる時間が予定より長くなることが決定的となった。VR体験の時間確保のため、学習コンテンツの発表時間を予定より繰り上げることが【学生4】の発表の最中に決定し、急遽【学生4】には予定より短い時間での発表終了となる旨を伝えることとなった。このことから、着実に準備を重ねてもこの様に突然のトラブルが起こる可能性や、自分たちの発表のみでなく他のコンテンツも含めて全体を見ながら調整を行うことの必要性を学生たちは身を持って知ることとなった。今回、トラブルへは時間調整という方法で対処することになったが、これが発表内容や形態の変更、発表自体が無くなる可能性も状況によっては十分有り得ることである。同じようなトラブルが、将来、保育現場で発生すれば、学生たちは自ら解決策を考えることになるため、良い体験が出来たのではと考えている。

(表2)は本事業に参加した学生たちの感想である。

表2 参加学生の感想

- この活動を通して海やフグについて知らなかったことを沢山知ることが出来ました。最初はどんな活動をするのか、ちゃんとできるのか不安でした。ですが、柳川さんやふくださんからオンラインで説明をしていただいたり、直接見てもらい意見をいただきわかりやすく教えて下さったので、最後までやって良かったと思いました。2つの園に行き、子どもたちと一緒に活動していく中で、「楽しかった!」「絵を描くの楽しい!」という声を聴く度にこのボランティアに参加して正解だったと思いました。このボランティアで体験したことをこれからの実習に活かしていきたいと思っています。
- 私はこのフグボランティアに参加して良かったと思いました。最初はフグが食べられると聞いて参加しましたが、今ではそんな理由でボランティアを申し込んだ自分を反省しています。実際はフグを食べられるだけではなく、これから保育者になるために必要な知識や技術を経験することが出来ました。また、子どもたちと触れ合い、一緒に遊びながら勉強することが出来ました。これからの実習でもボランティアで学んだことを活かし、自信をもって子どもたちと関わることができるよう、これからも向上心を持って様々なことに挑んでいきたいと思っています。
- 私は、子どもたちに伝えるという部分で一番苦労しました。分かりやすく伝えるために、イラストや写真、簡単な言葉に変えることなどを頑張りました。発表のセリフは最初のものより簡潔になり、自分なりに分かりやすくとめられたと思いました。このことで少し文章力に自信をつけることが出来ました。まだまだ改善点はあったと思いますが、自分にとっては初めて子どもたちの前で発表し、実習に活かせる点を見つけることができ自信に繋がりました。私はもともとフグについて詳しくなかったのですが、調べたり実際に話を聞いたりしたことで、改めてフグについて知ることが出来ました。また、他のメンバーの発表を見て、どれも楽しく参考になりました。体操やダンスなども子どもたちと一緒にすることができ、楽しかったです。他の方のプレゼンも言葉使いがとても綺麗で、まだまだ勉強していこうと思いました。今回の活動で学んだことを実習で活かせるように頑張りたいと思います。半年間ありがとうございました。また活動があればやってみたいと思います。
- 海にいる生き物には何がいるかを聞いた時、園児たちが沢山答えてくれて、その後のフグの話にスムーズに進めて良かったです。フグの話をしている時は真剣に聞いてくれてとても話しやすかったが、子どもたちの発言の場がもう少しあっても良かったと思いました。ダンスや制作は楽しそうにやっていたなと思います。制作で使うシールは一人2つまでとの説明がありましたが、シールは一つずつ切っておくと分かりやすかったかなと思いました。VRはとても楽しそうにしており、「もう一回したい」と言っている子もいました。
- 私は今回のボランティア活動で、子どもたちに伝えることの難しさを学ぶことが出来ました。ただ海にゴミを捨てたらいけないと言うのではなく、子どもたちに分かりやすいような言葉選びやイラストを使った説明、実際に制作を体験したりすることで視覚的にも感覚的にも理解してもらうことが出来るということが分かりました。制作の際には、子どもたちになぜそのデザインにしてみたのかななどの声かけをし、コミュニケーションを多く取ることを心がけました。
- 想像していた以上にハードだった、というのが一番に思い浮かぶ率直な感想です。私たちは何を求められているのか、自分がやりたいことは正しいのかも分からないままに活動が進み、自信がないまま準備を進めていたように感じます。形が見えてきた頃から、ふくださんに丁寧に細かくアドバイスして頂き、子どもへの支援の仕方や子どもの興味を引く方法などを学び、足りないことなどに気付くことが出来るようになってきて、並行して、短大の授業も進み、その一つひとつが腑に落ち、理解することが出来ました。イベント当日は、子どもたちのリアクションにとっても助けられ、徐々に緊張もほぐれていきましたが、子どもたちの想定外の言動に対応する自分のスキルの無さに反省するばかりで

した。ですが、想定・予知出来るが増えたこと、ふくださんからイベントでの発表を見て頂いたアドバイスは、今後の教育実習や保育実習に役立てられると感じています。とても大変なプロジェクトでしたが、貴重な経験をさせていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

- ・この活動を通して沢山のことを学びました。最初はこの活動は何をするのか分かりませんでした。柳川さんやふくださんが分かりやすく教えて下さったので最後までやり遂げることが出来ました。園に行って、子どもたちと活動していく中で「楽しかった」という声をきく度にやって良かったと思いました。ボランティアとして沢山のことを学んだので実習に活かしていきたいと思います。子どもたちの笑顔ややりきった表情を見たいと思います。そのためにも、今から先も沢山のことを頑張っていきたいと思います。
- ・今回のボランティアを時系列で振り返ると、アレンジしていただいた7月の唐戸市場でのワークショップ体験から、フグの泳ぎ方に着目し、夏季休暇中に輪ゴムの力で胸鰭が動くフグの模型を作成し、中間報告を行った。その際、ふくだ氏より張り子のフグの制作の提案を、柳川氏よりフグの動きの身体表現の提案を頂いたことで、しおかぜの里こども園での教育実習のプログラム骨子が固まった。当日の子どもたちへの制作の説明方法についてもふくだ氏にアドバイスを頂き、同級生たちのサポートもあって、子どもたちに楽しい時間とTake Home Messageを提供できたように思う。子どもたちが制作した張り子のフグはそれぞれに個性があり、芸術的センスに溢れ、張り子のフグを手にした笑顔の子どもたちの集合写真は思い出深い一枚となった。

4 1年生が本事業へ参加することのメリット

本事業への参加を通して、発表者となった学生もサポーターとなった学生もそれぞれが得た学びは非常に大きい。今回、有志で参加した学生は全員1年生であり、本格的な実習経験のない段階にも関わらず2回の教育実習を何とか終えることが出来た。本学の場合、保育士資格と幼稚園教諭二種免許状取得のために必修となる「保育実習（施設実習除く）」と「教育実習」は2年次に実施される。それらの実習に臨むにあたり、学生たちの多くが「難関」と捉えるのが設定保育である。この設定保育は、実習園や活動内容によって多少の違いはあるものの、大体45分程度、子どもたちを前に実習生がまさに「先生」としてその場を任されるというものである。事前に指導案を立て、ねらいに沿って導入から展開、まとめまで行うことが求められる。まさに、本事業で学生たちが行った学習コンテンツの発表と同じである。設定保育を経験した2年生であれば、子どもたちとの実際の関わり方のコツや注目の集め方、制作作業時の配慮点、子どもの気持ちに寄り添いながらの声掛けなど、具体的なイメージを持つことも可能である。しかし、今回参加した学生は先述の通り1年生であり、これらのイメージもない状態でのスタートであった。加えて、どのような園児たちが参加するのかもイベント当日に顔を合わせるまで分からないという状況であった。経験が無いながらもそれぞれが出せるだけの力を出し、その場で求められることに何とか応えようという姿が伺えた。

本事業での学習コンテンツの発表と2年次の実習で行う設定保育との違いを考えると、

学習コンテンツの発表に関しては「自分の意志で事業へ参加し、自らも学び、そこから作り上げた物を使って子どもたちに教える」という、学生の内発的動機付けが活動の根本に終始存在し続けていることではないかと感じた。設定保育に関しては、もちろん個人差はあるものの「実習だからやるしかない」「やると決められているものだから仕方がない」という思いがどうしても拭いきれないのではないかと感じられる言動がよく見受けられる。例えば、本事業の学習コンテンツの制作にあたっては、園児たちに「何を学んで欲しいか、何を感じて欲しいか」というねらいを定めてから具体的な内容検討をスタートした。これに対し、設定保育の計画を立てる際、学生の大半はゲームやダンス、折り紙や紙コップ等を使った制作作業などの活動内容の決定が先となる。自らにかかる準備量や精神的な負担が最小となるような活動が選ばれやすく、その後、辻褄を合わせるかのようにならざるを得ない流れとなる。そうすると、学生の頭の中にねらいが前提として存在した上での活動ではないため、活動中に行う子どもたちへの声掛けや促しがねらいとは外れたものになってしまう、まとめがままならずただ遊んで終了となってしまうということも起こってくるのである。このような状況を防ぐためにも、本事業の学習コンテンツ制作のように、まずは自分自身が楽しみながら学び、そのポジティブな感情を原動力にしながら子どもたちに伝えたいことをまとめあげていくというプロセスこそ、1年生の段階では是非学生たちに体験してもらいたいものである。1年生ということで、活動時には経験の無さによるデメリットももちろんある。しかし、学生たちが将来保育現場で子どもたちと向き合っていくということを考えると、保育者としての基礎を学ぶ大事な時期における本事業のような経験はメリットの方が大きいと考えられる。また、今回はメインで発表を行った学生とサポーターとして発表を支えた学生とに分かれたが、それぞれがメインなりあるいはサポーターなりの大変さや課題、達成感などを感じたことであろう。保育の現場でも自らが主で動く場面ばかりでなく、他の保育者の動きに合わせて臨機応変に動いたり、サポーター的に幅広い視野で現場を見たりということが必要になってくる。その場で自分に求められていることは何か、どのような視点が必要かなど、本事業での経験から楽しみながら学ばせていただいたことを、是非今後の本学での勉学や実習などでいかしてもらいたい。

5 まとめ

本事業に関しては、本学のみでは企画・実行・継続がほぼ難しいと考えられるレベルの活動へ短時間で効果的に参加させていただき、学生のみならず教員も、非常に多くの学びや刺激を受けることばかりであった。学生の実際の活動自体は下関という小さな地域に限られるが、その活動が結び付いているのは世界と繋がる海であり、自分や子どもたちの未来であるという、より大きな視野を持つきっかけになるような活動であった。加えて、本事業が持つ魅力の一つ

が、今後目指すのがこの教育実習の自走化であるという点である。事業としての期間を終えたとしても、本学保育学科が地域へ提供できるものとしてこの学習コンテンツを定着させていくことを見据えてのサポートも検討されている。多少、活動の形が変わる部分は出てくると考えられるが、地域に支えられながら日々教育活動を行うことが出来ている本学としても、何か一つでも地域に還元できるものが増えたり地域との繋がりを広げることができたりすることは非常に有難いものである。

今後の課題としては、次のような内容が挙げられる。今年度の活動の中では、学生たちの教育実習を受けた園児たちがどのようなことを感じ取ってくれたか、どこに興味や楽しさを感じてくれたのかなどを含めた反応の把握や、本活動のねらいがどの程度達成できたのかの検証に欠けていた。したがって、教育実習の内容を構成していく段階から効果の検証方法を検討しておくことが必要と思われる。また、本事業は学生たちが現場での経験を積むことが出来る貴重な機会であることから、教育実習先となった園の先生方からも発表についてのご意見やアドバイスを頂けるような仕組みを考え、学生のスキル向上へ繋げていきたい。手探りの部分も多かったこの初年度の活動であったが、より充実した活動へと今後発展させるため、さらに教員それぞれが専門性をいかした指導を続けていきたい。

謝辞

本事業での活動に際し、手厚くご支援・ご指導いただいた柳川舞氏、ふくだのぞみ氏、安本みゆき氏に深く感謝申し上げます。

参考・引用資料

- 1) FUKU レボリューション <https://fuku-revolution.com/>, (2023.12.20 アクセス)
- 2) 日本財団 <https://www.nippon-foundation.or.jp/>, (2023.12.20 アクセス)
- 3) 海と日本プロジェクト <https://uminohi.jp/>, (2023.12.20 アクセス)
- 4) <https://uminohi.jp/news/cpr-2022-2115-6118/>, (2023.12.20 アクセス)